旺文社文庫

夕鶴・彦市ばなし

（他）おんにょろ盛衰記・山の背くらべ
絵姿女房・瓜子姫とアマンジャク
女工哀史・百姓女たよ・阿詩瑪

木下順二著

「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらんとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長　赤尾好夫

〔編集顧問〕　伊藤整　茅誠司　木村毅
（五十音順）　塩田良平　中島健蔵　森戸辰男

彦市ばなし　他七編　180円

初版発行　月29日　初版発行
重版発行　月1日　重版発行
順二　木下　順二
正博　鳥居　正博
社印刷所　加藤文明社印刷所

株式会社　旺文社
162　東京都新宿区横寺町
電話　東京（03）267－1111〔代〕

403130
© 旺文社　1967
（許可なしに転載，複製することを禁じます）

（中村印刷・三宅印刷・穴口製本）

取り替えします
中し出ください

旺文社文庫

夕鶴・彦市ばなし

（他）おんにょろ盛衰記・山の背くらべ
絵姿女房・瓜子姫とアマンジャク
女工哀史・百姓女たよ・阿詩瑪（アシマ）

木下順二著

旺文社

目次

夕鶴　五
彦市ばなし　四五
おんにょろ盛衰記　七一
山の背くらべ　一六七
絵姿女房　一七九
瓜子姫とアマンジャク　一九五
女工哀史　二一三
百姓女たよ　二三三
阿詩瑪　二三三
解説　戸板康二　二七一
人と文学　二七一
作品解説　二七六
作品鑑賞　二八三
方言について　二八九
あたらしい喜び――『夕鶴』のこと　山本安英　二九一

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

代表作品解題　二九三
参考文献　二九八
年　譜　二九九

舞台写真　山本安英の会提供

原文の表現をそこなわない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。また、難解な語句や事項には、小活字で傍注を加えた。

（編　集　部）

夕（ゆう）

鶴（つる）

与ひょう
つう
惣どう
運ずん
子供たち

一面の雪の中に、ぽつんと一軒、小さなあばらや。家のうしろには、赤い赤い夕やけ空が一ぱいに――

遠くからわらべ唄――
　じゃんにきせるふとぬう[1]の
　ばやんにきせるふとぬうの
　ちんからかんからとんとんとん……

家の中ではいろりのはたに眠りこけている与ひょう。
唄がやんで子供たちが駆けて来る。

子供たち　（声をそろえて、うたうように）おばさん、おばさん、うた唄うてけれ。おばさん、おばさん、遊んでけれ。おばさん、おばさん、うた唄うてけれ。
与ひょう　（眼をさまして）なんだなんだ。
子供たち　おばさん遊ぼう。おばさんうた唄うてけれ。おばさん。おばさん。
与ひょう　なんだつうか？　つうはおらんでよ。
子供たち　おらんのけ？　本当けっ？　つまらんのう。どこさ行ったんけ？
与ひょう　どこだやら、おら知らんわ。
子供たち　どこさ行ったんけ？　いつ帰るんけ？　よう、よう、与ひょうどんよう。

（1）太布。太い糸で荒く織った布。

与ひょう　ええやかましのう。（立つ）
子供たち　（逃げながら）わあいわあい、与ひょうどんが怒ったぞ。与ひょう。与ひょう。与ひょう。
　のばか。
与ひょう　えへへへ。逃げんな逃げんな。おらもいっしょに遊ぶでよう。
子供たち　何して遊ぶ？
与ひょう　何して遊ぶ？
子供たち　ねんがら。[1]
与ひょう　ようし、ねんがら。
子供たち　唄。
与ひょう　ようし、唄。
子供たち　雪投げ。
与ひょう　ようし、雪投げ。（いいながら子供の中にはいる）
子供たち　かごめかごめ。[2]
与ひょう　ようし、かごめかごめ。
子供たち　鹿、鹿、角何本。[3]

（1）根木・念木とも。こどもの遊びの一。三、四〇センチの木、または鉄のくぎなどを地面にさしこみ、何人かの相手が同様の木またはくぎでそれを倒そうと争うもの。（2）こどもの遊戯の一。（3）こどもの遊びの一。一人が他におぶさって、「鹿、鹿、角何本」と言って指を何本か出し、相手にあてさせるもの。

与ひょう　ようし、鹿、鹿、角何本。さあ行くぞ行くぞ。
子供たち　鹿、鹿、角何本。（くり返しつつ駆けて去る）
与ひょう　（行きかけて）そうだ、つうが戻って来て汁が冷えとってはかわいそうだ。大事な大事なつうだけにな。（鍋を火に掛けている）

つうが奥からすっと出る。

つう　まあ、あんた……
与ひょう　つう、どこさ行ってた？
つう　ううん、ちょっと……そんなこと、あんた……
与ひょう　えへへ。つうが戻って来て汁が冷えとってはかわいそうだけに火に掛けといてやった。
えへへ。
つう　ありがとよ。さ、ごはんのしたくをしてあげような。
与ひょう　うん。なら、おら遊んで来る。ねんがらをするだ。
つう　まあ、ねんがら？
与ひょう　それから雪投げ。それから唄。
つう　それから……かごめかごめ。それから鹿、鹿、角何本、でしょう？
与ひょう　そうだ、鹿、鹿、角何本だ。つうも来い。
つう　行きたいな。でもごはんのしたくをしなけりゃ……

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

与ひょう　ええで、来い。（引っぱる）

つう　だめよ。

与ひょう　来いちゅうたら来い。なあ、いっしょに遊ぶだ。

つう　だめよ。だめよ。だめだったら。（笑いながら引かれて去る）

遠くから聞こえているわらべ唄――
惣どと運ずが現われる。

惣　ど　あれか？　あの女が与ひょうの女房か？

運　ず　そうだ。与ひょうのやつ、急にええ女房を貰うてしあわせなやつだ。近頃はろばたで寝てばかりおるわ。

惣　ど　ばかはばかなりに、昔は大した働きもんだったがのう。どうしてあげな[1]ばかのところへ、あげなええ女房が来たもんだ。

運　ず　いつどこからともなく来よったが……おかげで与ひょうは懐手で大金もうけだ。

惣　ど　おい運ず、そら嘘じゃあるめえな、その布のはなし。

運　ず　ああほんまだ。町に持ってけば、いつも十両に売れるわ。

惣　ど　ふうん。その布をあの女房が織るちゅうだな？

運　ず　そうだ。ただな、あの女房、決して織っとるところを見ちゃならんちゅうて機屋にはいる

（1）あのような。

げな。そこで与ひょうがまた正直にのぞきもせんと寝てしまうと、あくる朝はちゃんと織り上がっとるちゅうこったわ。なんせおめえ、美しい布だで。

惣　ど　鶴の千羽織り――ちゅうただな？

運　ず　町の人がそういうだ。天竺(1)まで行かな見られん珍しい布だとよ。

惣　ど　運ず、われ(2)、間にはいってえらいとこもうけをしとるんだろう。

運　ず　えへへ、えらいとこっちゅうほどでもねえでよ。

惣　ど　この野郎。けどな、もしそれがほんなもんの千羽織りなら、とても五十両(3)や百両の騒ぎではねえだぞ。

運　ず　あれ、そうかね？　どだいなんだね？　鶴の千羽織りっちゅうは。

惣　ど　それはな、生きとる鶴の羽根を千枚抜いて織り上げた織り物だ。

運　ず　ほおん。あの女房、いったいどこから鶴の羽根など集めて来よるんだろのう？

惣　ど　ふうん、こっちが機屋か。……（思わず上がりこんで隣室をのぞく）なるほど、はたが置いてあるわ。……やっ。

運　ず　なんだなんだ。

惣　ど　おい見ろ。鶴の羽根だ。……ふうん。やっぱりこらァ……

運　ず　本ものか？……

（1）今のインド。昔の外国は唐天竺といって、天竺は最も遠隔の地とされた。（2）おまえ。対称の代名詞。（3）貨幣の単位。一両は金貨で一分の四倍。徳川時代、十両盗めば笠の台が飛ぶといわれた。

間――

いつの間にか帰って来たつうが、奥の部屋からすっと出る。

運　ず　わっ。

惣　ど　あっ。こ、こら、留守の間に上がりこんで……

つ　う　……？（鳥のように首をかしげていぶかしげに二人を見まもる）

運　ず　へい、おらはその、向こうの村の運ずっちゅうもんで、あの布のことではいつもどうも与ひょうどんに……

つ　う　……？

惣　ど　そんで、なあかみさんよ、実はその、布のはなしをこやつから聞いて……おらも向こうの村の惣どっちゅうもんだが、ちょっとはなしがあって来たもんだ。……全体それは、こういっちゃなんだが、ほんなもんの千羽織りかね？

つ　う　……（ただいぶかしげに見ているが、ふと物音でも聞いたように、身をひるがえして奥に消える）

惣　ど　……？

運　ず　……？

惣　ど　おい……

運　ず　なんだあらァ？　こちらのいうことは……

惣　ど　うん、一つも言葉が通じんような……まるで気配が鳥のようだ。
運　ず　ほんまだ。まるで鳥のようだ。

間――

夕やみはようやく濃く、その中にいろりの火のみちろちろと赤い。

惣　ど　（鶴の羽根を見ている）のう……鶴や蛇がのう、ほれ、人間の女房になるっちゅうはなしがあるのう。
運　ず　な、なんだと？
惣　ど　ううん……そういえば、きのう村の仁じ[1]がいうとった……四、五日前の夕方に、あの山の池のところを通りよったら、女が一人水際に立っとったげな。……なんやら風がおかしいと思ってそっと見とるとよ、すうっと水の中にはいったところを見るとおめえ、鶴になっとったげな……
運　ず　ええっ？
惣　ど　そうしてしばらく水の中で遊んでから、またもとの女になって、すうっと戻って行ったちゅうが……
運　ず　ふわあ……（外へ逃げ出す）
惣　ど　お、おい、なんだ、妙な声出して……（思わず自分も外へ出る）

（1）仁爺。仁じいさん。「じ」は「じい」「じじい」（方言については二八九ページ参照）。

運　ず　お、おい、ならあの女房が、つ、鶴……

惣　ど　ばかが、そげなことわかるもんけ。いや、そげなばかなはなしが……

運　ず　ああどうしよう。おら与ひょうをだまして大金もうけをしてしもたが……

惣　ど　気にやむなって。それがほんなもんの千羽織りなら、都さ持ってけば千両にはなるわ。

運　ず　な、なんだ？　千両？

惣　ど　それにわれのはなしでは、あのばかの与ひょうが近頃ァ大ぶん欲がついて来て、金のことなら結構はなしがわかるちゅうでねえけ。

運　ず　うん、そら、まあそうだが……

惣　ど　だでよ運ず、こらやっぱりなんでも与ひょうを抱きこんで、どんどんと布を織らせるこったぞ。

運　ず　うん……そらァ……うん、そうだのう……

惣　ど　や、戻ってきおった。

与ひょう　（ふらふら帰って来る）　はあ、じゃんにきせるふとぬうの、か、ちんからかんからとんとんとん、か……おら、つうの飯炊いてやるの、すっかりと忘れとったぞ。

惣　ど　おい、与ひょう。

与ひょう　はあ？

惣　ど　忘れたか？　向こうの村の惣どだが。……おい運ず、われ話せ。

与ひょう　ああ運ず、また金もうけか？

運　ず　おお、あの布さえ持ってくればいくらでももうけさしてやるわ。
与ひょう　もう布はないでよ。
惣　ど　どうしてだ？
与ひょう　もうあれでおしまいだとつうがいうだもん。
運　ず　そげなおめえ。またもうけさしてやるに。
与ひょう　うふん……おらつうがいとしゅうてならん。
惣　ど　いとしかろが？　だでどんどんと布を織らせて金を溜めるだ。
与ひょう　そんでもよ、布を織るたびにつうがぐんと痩せるでよ。
惣　ど　なに、痩せる？……おい与ひょう、われの女房は、いつどげなふうにしてわれのとこさ嫁にきた？
与ひょう　はあ？　つうか？　いつだったか晩げにな、寝ようとしとったらはいってきて、女房にしてくれちゅうたでよ。えへへ……
惣　ど　ふうむ……おい、わら、いつか鶴をどうにかしたことは……なかろうな？
与ひょう　はあ？　鶴か？　うん、鶴なら、いつだったかおらが畑打っとったら、くろに[1]鶴が下りてきてよ、矢を負うて苦しんどったけに抜いてやったことがあるわ。
惣　ど　なに？……ふうん……おい運ず……いよいよこらァ、ひょっとかするとほんものだぞ。
運　ず　……（ふるえている）

（1）あぜの内側。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com